

第5回 万博のインパクトを活かした大阪の将来に向けた ビジョン有識者ワーキンググループ 議事録（メモ）

- 日時 : 令和元年11月19日（火）15時半～17時半
- 場所 : 大阪府庁本館5階 正庁の間
- 出席者 : * 敬称略。五十音順。所属、職名は開催当時。

<委員>

- 嘉名 光市（大阪市立大学大学院工学研究科 教授）
- 川竹 絢子（WAKAZO 執行代表）
- 野村 将揮（Aillis Inc. 執行役員 Chief Creative Officer、
World Economic Forum（ダボス会議）Global Shaper）
- 橋爪 紳也（大阪府立大学研究推進機構 特別教授、
大阪府立大学 観光産業戦略研究所長）
- 森下 竜一（大阪大学大学院医学系研究科 寄附講座教授）
- 薬王 俊成（WAKAZO 執行代表）

- 事務局から資料4、5、6、7を説明。その後、各委員間での意見交換を実施。

《意見交換》

○橋爪委員（座長）

ではまず、2ページ、3ページにある「万博後の将来像について」について、ご意見いただければと思いますが、いかがでしょうか。前回提示いただいた Amusing Creations という概念を上位に置き、日本語としては「世界一ワクワクする都市」を掲げる案です。まず、Amusing Creations を提案いただいた野村委員からご意見あればと思いますけれども。

○野村委員

野村でございます。前回お話ししましたとおり、Amusing Creations というのは、100案ぐらい出した中から最終的に選んだものであります。

「おもしろい都市」は、やはり2案目ぐらいで出ました。これを選択肢から無くした理由は、「おもしろい都市」とか「おもしろい万博」という形容が、あまりおもんないと思われるのではないかと思ったためです。ちょっと一般的かつストレート過ぎるなあと。「大阪おもしろいよね」と大阪の人たちが自分で言ってしまうと、やっぱりスベってしまうじゃないかなと。

そういう意味では、誰に向けた言葉なのか、という点が、我々の中でもちゃんと揃

っていた方がいいかなと思っています。例えば、「WANPAKU」というのは、ワンガリ・マータイさんの「MOTTAINAI」のように、和製英語的に世界に広がっていく余地もあるかなと思って打ち出したものでした。資料5ページのご説明は明瞭ですし、よく分かるし、反対するわけではないのですが。

○橋爪委員（座長）

原案の2ページ、3ページでは、「おもしろい」というのは心のレベルではないのではなくて、という事だと思います。

○野村委員

おっしゃる通りです。

○橋爪委員（座長）

「世界一ワクワクする都市」は、どうでしょうか。

○野村委員

コピーライティングという視点で考えると、「世界一おもしろい都市」よりも個別のイメージを持ちやすいかとは思いますが。また、言葉を選ぶ際には、エッジが効いているというか、直裁に言えば、珍しい言葉を使うことが望ましいわけですね。「コーラは炭酸だ」みたいな感じでは力に欠けます。「わんぱくな都市」も、公的な性質を加味して、かなりエッジを弱めた表現ではあるのですが。

○橋爪委員（座長）

はい。他ご意見いかがでしょうか。

○川竹委員

前回の際に「わんぱく」という言葉を入れていただいて、何かその creation する時の都市がどういう在り方になるという時に、選ぶという言葉もすごくいいなと思ったので、何かこれはそのまま入れていただきたいというのが、かなり強い想いとしてあります。

色々考えた結果、この3つで結構いいのじゃないかというのは思って。「いのち輝く幸せな暮らし」と「世界をともにつくる」というところと、「多様なチャレンジによる成長」というのは、路線軸としてはすごくいい形で。後は何か言葉の選び方の問題なのかなというのは、少し思っているところです。

個人的には、せっかく万博が「いのち」というのがテーマだったら、もう少し思いというか、寄り添うというか、熟議出来るようなちょっと深い言葉もどこか一つに入っている方が、何かいいのかなというのは、感じています。「いのち」というものに

対して、何か「create」するという言葉も軽いと思いますし、「amusing」というのも軽いと思ったりもしますので。もう少し一つ実学的な、根源的な、突きつけるようなものを、キャッチフレーズの後半の方でも考えていけたらいいのかなというふうには今、思っていることです。ありがとうございます。

○橋爪委員（座長）

はい。他はいかがでしょうか。どうぞ。

○嘉名委員

これパッとみた時に、確かに皆さんおっしゃる通り、あんまり僕の違和感なくは受け取ったのですが、細々としたところがちょっと気になったのはあります。

WHOの人と話をして、健康の定義を議論して、むしろ教えてもらっていたのですが、ここに書いてある通り「精神的・社会的・肉体的」というものですね。この状態ということなのですが、当てはまる人ってそんなにいないですよ。すごく目標像が高い。私自身も胸に手を当ててみると、その状態に至ってないところがたくさんある。それは日によって違うという事もあるかもしれないけれども。そうすると、めざすべき目標像としてはかなりいいような気はするのですが、どうしても目標像が高過ぎて、そこにちょっと近寄れない。スーパーマンとかすごい人が頑張る目標で、一般の人達は到底なかなか近付きようがない、そういうニュアンスがあるような気はしました。

例えば、それなりに配慮はされていて、Inclusive Co-Creationとなっているから、その誰かを鼓舞する訳ではない。何か優れた能力を持っているエリートだけが何か物事を動かすという事ではないのだという事は分かるのですけれど。

だから、それを回避しようとする、何かなと思って考えていたのは、例えば「元気が出る」とか、「元気が湧いてくる」とか、自分自身がチャレンジ出来る状況はいかに作るか。

それから「いのち輝く幸せな暮らし」というところで、肉体的・精神的・社会的と正に健康の定義が書いてあるのですけれども、肉体的・精神的・社会的にも健康である個人ということと、肉体的・精神的・社会的にも生き生きとした社会とか、地域というのはちょっと意味が違いますよね。だから地域という状態言えば、恐らく健康じゃないところもあって、もちろん健康である事が望ましいのですけれども、そうじゃないところもあって、でもそうじゃない人達も支え合う地域とか社会の姿が見えてくるお互い支え合うみたいな概念も入ってくる。その辺りが少し整理した方がいいのかもしれないと、このページでは思っておりました。

とは言え、また何か2つ、3つキーワードが出てくると、より分かりにくいなという気もしたのですけれども。かなり人をクローズアップしている立て付けなので、それに対して地域とか社会とか、そういうものがどう対処していくのか、あるいはコミ

ユニティとか、そういうものがどう対処していくのかみたいな事が少し見えづらくなっている印象はあるかなと。実際に施策に落としていくと、多分、市町村とか、そういうものに落ちていく訳ですね。その時に個というもの、人っていう事だけだと、なかなか、しんどいかもかもしれないと。ここはちょっと思っていました。そんなところを印象としては持ちました。

○橋爪委員（座長）

2のところの「いのち輝く幸せな暮らし」の中の説明文が、健康な人だけの事を書いてるという整理だと思いますが、ちょっとここはおっしゃる通りだと思います。そこは、よろしく願いいたします。

○森下委員

「世界一ワクワクする都市」というのは面白いとは思いますが、その下の段階を見ると、そんなにワクワクしないというか。具体的にワクワクするイメージが全く湧いてこないという。

やはり若い人達が見て 2050 年だから、僕らではなくてもう今、正に 10 代とか、あるいは 20 歳ぐらいの子が見て、ワクワクするような言葉が上がらないと面白くないのではないかと。綺麗にまとまっているのですが、何か、年寄りがつくった案としか見れないところがあって。せつかく 2050 年までの話で、今回も非常に若い人が多い中で、何となく寂しいかなという気がするのです。

「いのち輝く幸せな暮らし」って何か老後を迎えるような話になっていて、その一緒に育っていくというイメージが無いのだと思うのです。つらつらと見ていると、何か一つは外への広がりが無いのだと思うのです。要するに大阪に海外から若い人達が入り込んで、一緒に育っていくという、第二世代というか、新しい日本人とか、新しい大阪人を作るというのが、やはり見えて来ないのだと思うのです。

今いる人達の中で、閉じた中で良ければそれでいいとは思いますが、多分それだと日本は生き残れないし、大阪も生き残れないと。前回から話が出ているように、万博をきっかけに、いかに大阪が外に開かれるか。そういう海外から若い人達が入ってきて、正に第二世代の大阪人と言っているのかわからないのですが、セカンドジェネレーションはそういう人達が作っていく大阪でないといけないだろうと思うのです。

そういうイメージが出ないと、せつかくの co-creation というのが生きて来ないというか、creation になってない気がするのです。だから、もうちょっと海外から人が入り込んで来て、大阪で育って、新しいファミリーとして生まれてくるのだと。それが今住んでいる人達と上手く共生していく。それが大阪の活力になって、次の日本の中心となっていくみたいなイメージが何か欲しいなと思うのです。

言うのは簡単で言葉は難しいのですが、ただ、今の日本のオープンイノベ

ーションって、日本国内のオープンなのですよ。これから、やはり、東京と大阪を今見てたら、アンケートが非常によく似て来ている。大阪らしさがなくなって来ているというのが一つの話だと思うのです。一方で、これからの大阪は、特にアジアに向けて広がって行って、アジアの若い人達が大阪に来て、一緒に育って行って、一緒に新しい街を作る。そういうイメージを出せるような仕組み、あるいは言葉というのが欲しいなと思うのです。枠を一個増やすのか、それはよく分からないのですけれども。ちょっと見てて、ワクワクしないというか、面白くないなと。イメージが湧いてこない、と、せつかく 2050 年、どんな街が大阪に出来て、そこで今、20 歳ぐらいの子がどういうふうにしてこの街で育っていくのか、そこが伝わるようなイメージの言葉が出てこない、と、ちょっと 2050 年を考えた意味があまり無くなってしまっているのではないかと。その辺何か入れてもらえるとね。言うのは簡単なのだけれど、「こういう言葉を入れて」というのはアイデアが、なかなか申し上げにくいものだけれども。でも、イメージ的にはそこがないと、次の大阪、サイバーシティとしての大阪、カタカナか英語か分からないですけれども、日本語ではない大阪という街というのが出ないと、多分、これから大阪は生き残れないと思うので。そこでは世界中に広がっていて、海外で暮らしているけれど「実は、私は大阪人だ」と、大阪で事業をしているのだと、居場所は日本ではないけれども、という人達がたくさん現れないと、多分、大阪というのは残れない街だし。それを逆に言うと万博をきっかけにつくれないかというのが大きいテーマだと思うのです。何かそういうイメージを上手く出してもらいたいものだけれど、ごめんなさい。具体的には思い付きません。

○野村委員

本当に森下先生がおっしゃった通りだと思っていて、多分、問題は資料の 2 ページなのです。役所ペーパーあるあるなのですけれども、因果関係が見え辛い。そして、因果関係が見え辛いので、包含関係が見えづらい。たとえば、amusing で creation に溢れたままだよというときに、このページの下の部分は何なのだろうとなってしまう。ひょっとすると 2 ページ目が要らないのかもしれません。図示すると混乱してしまうので、そのまま 3 ページにいくと。あまり資料構成上のテクニカルな話をしたいのではないのですが、恐らく Amusing Creations と言えば、多くの府民若しくは多くの府外の人、海外の人が分かるだろうと思いますので、見せるべきは、具体的施策ではないかと思うのです。例えば、資料中の Creative Innovation とか Human Well-being といった次元のものよりも、「大学生全員が起業します」とか、「中学生全員一年留学します」とか打ち出しをする方がいい、ひいては、こういったものを 100 個並べる方が多くの人に刺さるかなと思います。

投影したい資料を調整していたため、川竹委員のお話をちゃんと掴めなかったのですけれども、哲学的なことがキャッチコピーに込められている必要があるかと聞かれればこれは結構難しく、ひとえに誰に何を伝えたいのかに依るのではないかと思います。

ます。我々は暗黙に知識量が多い人たちを対処として想定しがちですが、たとえば大阪にちょっと立ち寄っただけの海外旅行客をターゲットングするのであれば、Amusing Creations でも、まだまだかなりハイスだなと思っているぐらいです。何か気取っているなと思ってしまうだろうなと。

○薬王委員

この前所用で来れなかったのですけれども、薬王でございます。何点かお話をしたいと思っているのですけれども、まず amuse の語源を一旦今のうちに言っておきたいというのがあって、amuse の語源を調べてみると基本的に楽しませるだったりとか、割とポジティブなものがあるのですけれども、一番の語源のところに、辛い事から目を背けて時間を浪費するみたいな感じの語源があって、そのところだけがネックかなというふうに思っているところです。

後もう一点が、川竹からもお話をさせてもらったのですが、amuse とか何と云うか知的な面白さというよりは、割と funny に近い面白さかと思っていまして、どちらかと言うとその知的な面白さとかというのがあった方が、都市を更に成長させるという面では、エンタメ要素以外の部分で、正に学術とかそういう意味合いでの面白さがあった方がいいのかなというふうに思っています。何と云うかインタレスティックなことを内包した方がいいのかなと。そういう意味合いで先ほど川竹がラボとか入れさせてもらったのも、そういう意味合いかなというふうに思ってもらっていいと思います。

先ほど、野村さんの話にもあったように、因果関係とかという話があったと思うのですけれども、確かに2枚目のところを見るとキーワードが羅列されていて、この中に「どういう都市にしたいのか」という思想の部分が見えてないが故に、文字が浮いてしまっているというのがあるのかなというふうに個人で思っていまして、その部分があった上でこのワーディングがあるのかなというふうに思っています。

もう一点施策が100個ぐらい並んでいた方が面白いのではないかと、全く僕もそう思っていまして、僕らも実際に昔100個ぐらいアイデアを作って、「こういう万博にした方がいい」というのを提案したのですが、確かにぼやっとした思想とか、大きな軸をつくるよりも、何個かのアイデアを羅列してしまっているというのが面白いのだろうなと。そうなった時に今の2ページ目、3ページ目を見ると、どういう人が活躍をしていくのかとか、正にペルソナ部分が欠けているが故に「いったいこれはどういう大阪になるのだろう」という何もイメージ出来ないという、且つ、「どういう面白さがあるのだろう」というのが分からないというのがあるのかなと思って。施策であったり、どういう人が inclusive の中で活躍していくのかという、ペルソナの部分を含めて実際に2050年に向けて動いていくという一つのストーリーを何個かつくってみて、その中でこういう施策が実際に走っているみたいな、ストーリーがあれば面白いのかなというふうに思っています。

○川竹委員

ずっと考えていて、2 ページの図の私は好きなのですが、大阪府さんの優しさみたいなものがここに詰まっているのが2 ページで、どこの3つを取っても本当に全ての人に配慮した優しい言葉だなと思っていて。さっきの森下先生の話聞いて、若い人がどういう時にやる気になるかなと思った時は、co-creation の方の共創ではなくて、competition の方の競争というか、そういう振り落とされるじゃないですけども、競争性がある方がやる気が出ます。大阪府さんは、そこで振り落とされた人もちゃんとネットですくう安心・安全の両面があるのが、大阪府さんの強みだと思います。

そう考えた時に Creative Innovation という言葉が、もう少し思い切ってもいいのかなと思っていて。例えば innovation というのは、もとある物を新しくするという形、言葉だと思うのですが、例えばこれを revolution に変えると、もう思い切って全部新しくするみたいな思い切りがある一方で、この右側の Human Well-being の方に、この human のところに inclusive を付けると、Inclusive Well-being という形で。左側で、こうちょっと振り落とされた競争社会、振り落とされる人でもちゃんと広いネットがあるのだよというところが従来のおおさかさんのいいところで、ちょっとワーディングの問題だと思うのですが、もう少し思い切りを持ってもいいのかなというふうに思いました。

それで言うと、三つ目の「世界をともにつくる」というのも何となく世界と調和をするのではなくて、もう1個大阪が世界で飛び抜けるのだという思いを持って、例えばSDGs の核になるみたいな形で、三つ目のワーディングですけども、世界の中のSDGs のハブなのだというようなエッジを効かせていくと、すごい「大阪、本当に変わろうとしているのだ」というのが伝わる形でいいのかなと思いました。

○森下委員

この議論が迷走する理由というのは、多分みんなの2050年のイメージがバラバラだというのが一番大きい理由だと思うのです。2050年にどういう街を皆さんがイメージしているかが、全然統一されないで、結局議論がなかなか集約していかないというのが一番大きな理由だと思うのです。

この図をどうするかは別なのですが、基本的には2050年というのは、僕自身が2階建ての街だと思っているのです。要するにフィジカルな部分のリアルな大阪、でこれも当然「Society5.0」がほぼ全部実現されて来て、しかも5Gとかが7Gとか8Gの世界の中で、ものすごく街自体もリアルなサイバーシティになっているだろうと。その中で若い人達がどういうふうに活躍する場をつくっていくか、又はお年寄りの方がどういうふうに楽をして苦労せずに生きていけるかというフィジカルがある。

一方で、2050年になると恐らくサイバーシティとしての大阪がものすごく大きく

なってないと、多分大阪は生き残れないと思うのです。サイバーシティというのは、ネット上で大阪という場所で経済活動する人が世界中から参加して、その場で大阪という、英語で書くと書かないかはわからないですけど、という街で皆さんが経済活動をしている。その中でたまにリアルなフィジカルな大阪に来て、「やはりいいなあ」と言う形で住みついていたり、あるいは帰るのですけれども仕事はここでやりましょうと。多分二つの街が上手く上に乗っかっていてないと、大阪は 2050 年に多分残れないと思うのです。別に大阪だけでなく、日本全体が多分そうなると思うのですけれども、その時にそういう二段階的な街をどういうふうに表示していくか。言っている内容もそれぞれサイバー上の話とネット上の話とフィジカルな部分というのが、それぞれあると思うのです。そこに対しての施策を打っていかないと、恐らく今後大阪の発展は続かないと思うのです。

今回、万博で 2800 万人、3000 万人あるいは 4000 万人のうちの多くは外国人でしょうし、その中で更にネットで世界中 80 億人のうち、前回のオリンピックで 60 億人が繋がったと言っていますから、今回も 60 億人ぐらいが繋がって見てもらわないと、多分大阪としてのレガシーは残ってこない。それで繋がった空間でのサイバーシティとしての大阪をどうやって 2050 年までに伸ばしていくか。単純に繋がるだけでなく、そこをベースに何かビジネスが出来るような形を整えてあげるとか、そういう人達が大阪に来て実際にリアルな大阪を見て、本当にこういう街だったのだと。それこそアバターとサイバーとしての大阪を、それぞれみんなが行き来出来るような環境をつくっていくようなことを考えないと多分駄目だと思うのです。

そういうところに対して、今、言っているようなそれぞれの言葉が生きてくれば非常にいいのだろうと思うのです。施策としては多分、サイバー上の話とリアルは違った施策になるのだけれども、一方で共通した要素はないといけないと思うので、そういう発想で見ていくと言葉が面白くなるのかなと思うのです。多分、そういう街じゃないと大阪に住みたいと若い子は思わないと思うのです。

多分、2050 年は二つを持つ世界になるだろうと言われているんですね。要するにフィジカルな状態の自分とアバターとしての自分。既に Vチューブとか出ていますけれど、そういうところで活躍する、既に 80 歳のおばあちゃんがひよっとしたら 10 歳の少女になって活躍している街があるのです、大阪という。そういうイメージの中でやはり全体的なことを考えていかないと多分、見失ってしまうのではないかなという気がするのです。今、何となく福祉政策っぽいのです、全体的に。僕らが歳を取って 80 歳で住みやすい街ではあるのだけれど、これだと発展性が無いと思うので、そういうリアルな空間とサイバー上の空間が二つあるような街の中で、どうやって発展していくかという予想を見せてもらおうと、少し若い子が魅力的に感じるのではないかなと思うのです。

○橋爪委員（座長）

ありがとうございます。時間の制限もありますので、私、一言、二言申し上げてま
とめたいと思うのですが。先週、上海に行ってきました。2010年上海万博の跡地、
及びそのレガシーがどのように示されているのかをヒアリングし、現場を見てきまし
た。

博物館の映像では、2010年に生まれた子ども達が、どのように未来において生き
ているのかということを示している。要は、2010年を過去のこととして振り返りな
がら、これから未来のことを語っている。私たちが議論している2050年には、2025
年の博覧会は25年前の出来事であるが、そこで示された理念は継承されているもの
だということを前提に、この将来像はあるべきであろうと思います。

なので、ここにある少なくとも「SDGs Advanced Osaka」英語はいいかも分から
ないけれども、その下の「Society5.0の実現」とかいうのは、2025とか、2030に出
来ているもの。2050年では、もはやそういうことを概念としては当たり前のことにな
っている。そのようなことを考えながら、2025年以降に生まれたもの、生まれる
もの等をイメージしながら書かなければいけない。

具体的に言うと、「世界とともにつくる」とかというのは、現在からの進行形で書
いていて動的、「いのち輝く幸せな暮らし」というのが名詞形で割とスタティック（静
的）なイメージ。多様なチャレンジによる成長というのは、継続して成長している
という変化を示す感覚になる。

一点目として、私は、2025年で我々は新しいことに気づき、我々は変わっていく。
その成果が、結果として、2050年が完成するといった時間の経緯を感じるものが可
能なワーディングがあればいいと思う。出来るだけスタティックな表現は使わない方
が良い。要は、我々は常に動き、変化していること、2025年から我々は変わる、な
いしは変わったというイメージを提示したい。

二点目としては、異なる概念、まったく違う発想を併置すると、新しい価値が生ま
れるという点。「Amusing Creations」がいいと思うのは amuse と creation という言
葉は、ふだんはあまり一緒には使わない。親和性のない言葉を並べて置いているので、
新鮮に感じる。

amuse は元々の語源の根幹にあるのは、muse で、美と音楽の女神。美と音楽の女神
も、大阪はアイコンとしてしばしば使ってきた。中央公会堂の上に乗っているのはメ
ルキュールとマーキュリー。美と芸術の女神と商売の商業の神を、隣同士に置く。こ
れはこれまでも大阪で、しばしば使われているアイコンのパターン。文化的なもの
とか美しさを求める姿勢と、新しいビジネス・商業の都市であることを強調する。物流・
人流を含めて人が交流することにより、文化的な発展をみるとともに、経済的繁栄を
生み、富を産んできた。異なる概念を隣に置くことで、新しい意味をもたらす。この
Amusing Creations というのは、二つの概念を並置しているということで、私は、よ
かろうと思います。

あと「Inclusive Co-Creation Lab」という概念は精査が必要。リビングラボと今

は言っているけれども、2050年までラボであるかどうかという、違うと思う。ラボで示されたアイデアを、実際の市街地に実装していく必要がある。とすると、ラボである時期は限定的になるのではないか。

もう一点は、ちょっとご意見がありましたけれども、基本的な考え方の「人が中心」という発想が重要だと思う。ここの考え方がぶれないように我々はしていきたい。ただし人が中心という言葉が、どのような概念なのかも深めるべき。これはルネサンス等の人間中心主義への回帰を言うのか、新しい考え方で人が中心ということか。中心という言葉とは何ぞやということが問われる。

私は人を中心に考え、「全ての人たちが可能性を最大限に発揮し、将来の大阪を、共に創り上げていく」の考えを基本的とするので良いと思う。この一文はこれで置いていても、私はいいのではないかと思います。世界の未来像ではなくて、大阪の未来像であり大阪府が考える施策なので、この人を中心とした大阪を共に創り上げていくというところは、異論がなければここはこの形でいかせていただきたい。ただし上の図の日本語の言葉と英語などが、これでいいのかどうかということをもう一度精査をするべきかなというふうに思っております。どうぞ。

○野村委員

ありがとうございます。先生がおっしゃる通り、amuseの語源はmuseなので、基本的にはポジティブな意味合いで、かつinterestingという意味合いも含まれているものと理解しています。

田中先生からご意見を頂戴しております。こちらのご意見は全くご尤もでして、実は僕の方でもAmusing OSAKAという案を作りました。しかしながら、Amazing TOYAMAとかなり近しかったために、候補から落としたものです。

先ほど僕が申し上げた話に語弊があるかもしれないので補足をする、sweeping statementは、みんなを内包するのというよりも、みんなを弾いてしまうのです。平和が大事だというスローガンは、正論であるがゆえに一般論の域を出ず、みんなを平和から無関心にさせてしまう。sweepingであればあるほど響かなくなるということ、僕は哲学を専門にしていたので、ずっと懸念しているものです。

なので、今日、まさに橋爪先生と森下先生のお話にもございましたが、エッジというか、尖った感じというか、「Connected with the Globe」、地球そのものと繋がっている、未来の宇宙と繋がっている、ぐらいなフルスイングをしないと、数十億人といった単位には刺さらないだろうなというのが所感です。

○橋爪委員（座長）

国際性とか世界に広がる感覚が今のところ無いと思います。私も同感です。

○野村委員

まさに、世界やサイバーといった次元の全然議論されていません。人間がそもそも外出するのとか、そのレベルの話も含めて本当は概念的に integrate した方がいいのかなとは思っています。それも Amusing Creations であれば、sweeping 感はあるものの、一応困えるかなと思って出しているところではいます。

○橋爪委員（座長）

では、時間が来ていますので、後でまた戻っていただいて、次に6ページの施策の並びに関しまして、ご意見があれば、6ページはこれまでこの場でご意見をいただいたものを整理して三つの柱で並べ直したということ。

○森下委員

6ページのところなのですが、Creative Innovation という一番上のパートは割とテクノロジーの話なので、分かりやすいとかイメージが湧くと思うのです。これが2050年もこの話かというのは別として、少なくとも具体的にどういうメリットがあるのか分かりやすいと思うのです。

分かりにくいのは下の「いのち輝く幸せな暮らし」で、10歳若返るとか住みやすさはいいのだけれども、例えば災害の教訓を活かすとか、新技術を活かした防災・災害対策とか、環境やウェルネスに配慮した高質な生活空間の提供、あるいはさらにSDGs 関連ビジネスとか、この辺になると具体的にどういう生活が変わるのかというイメージが全く湧いてこないのです。具体的にこれはどういう施策に結び付くのかというのが見えて来ないので。どういうイメージで皆さんはこれを考えて入っているのかというのは、ちょっとお聞きしたいなと思っていました。こういうことが出来るという話があるのであれば、それをもう少しブラッシュアップして言葉に出来ると思うのですが、言葉が並んでいるだけで何となく2050年、一体何が出来るのかというのがちょっと見えてこないなと思っているのですけれども。

○橋爪委員（座長）

この並びはこの場で出た意見を箇条書きされているので。

○森下委員

これ災害の教訓を活かすのは例えば、どういうことを考えた話なのかなと言う気がしているのです。前回、私はいなかったので申し訳ないのだけれども。ある程度イメージが湧いてくるような言葉というか、何と言うか方向性があるともっと分かりやすいのではないかなとは思っています。

○野村委員

この紙でレイヤーがごちゃ混ぜな印象を受けるのは、何をするかという How のとこ

ろと Why と What が全部混合されているからかと思います。このページは取組なので How と What をすると書くはずなのですが、出来上がった結果が書かれている。まさに災害の教訓を活かすというのは、活かされている状態を言っているのもあって、どう活かすのか、何をするのかということが書かれていないので施策にならない。方向性の紙なのであれば、そういう整理をすればいいのかなという気はします。

○橋爪委員（座長）

ここ方向性なので、柱立てだということですが。具体的な施策であってもいいが、この段階では未だ方向性である。いかがでしょうか。

○森下委員

2050年の災害対策にどのようなものがあるのかとイメージは教えてもらえると、すごい湧きやすいのだけれども。

○事務局

具体的にはこれまでのワーキングのなかで将来像の話しを中心にしてきました。方向性とかなかなかそこまで議論が進んでいないというのが現状であると思っていました。その中で、最初にいただいておった資料であったり、意見交換のなかで出てきたような内容を記載しておりますので、バラツキがあるとは思いますが、一旦、このような形でまとめさせていただいたと認識していただければと思っています。森下先生からありましたが、将来像だけではワクワクというのは、ワクワクが見えてこないと思いますので、方向性と施策が少し見えると、ワクワク感が出てくるかなということでございます。将来像の実現に向けた取組みの方向性について、どういった観点から考えられるのかということをご意見いただけるとありがたいなと考えております。

○嘉名委員

例えば、私の分野で言うとウォークブルシティというのは書いていただいているのですが、例えば都心に限らず、人の為の空間みたいな話はいっぱいあって、御堂筋の歩行者空間化とか、自動車中心の街から人中心の街に変えていくとか、高齢者がたくさん住んでいるような団地を次世代型のものに組み替えていくとか、言葉単体として見ていくと別に今やっていることかもしれないけれども、それもとにかくザッと並べて行って、ちょっと一回溢れさせて、そこから取捨選択していくみたいな作業をした方が良く、恐らくワーキングでパラパラと皆さんが言ったキーワードをとにかく集めても、なかなかものにならない気はしているのです。だから、少しそういう意味では色々なキーワードをザッと集めるみたいなことがあっていいのかなということ。

あと、例えば産業の話もライフサイエンスとかテクノロジーとか書いてあるのですが、逆転サヨナラ満塁ホームランみたいな。何となくそういう感じ、一発大阪当てたるぞみたいな感じがちょっとあって。地に足が着いててもいいのかなと。持続可能な産業構造みたいなこととか、持続可能な地域づくりとか。例えば我々の分野で言うと 20 世紀の都市計画というのは、住環境と産業政策とか、それぞれ分けてやってきた訳です。ところが今は、これからは仕事があるところに人が住む時代だから、仕事と暮らしが分けられないのです。じゃあ、そういうことに都市計画が対応出来ているかと言ったらまだまだ課題がある。そうすると新しい Creative Innovation と Human Well-being が実は繋がっているみたいな話になったりとか。少しキーワードをまず溢れさせた方がいいのではないかという話を取りあえずしておきます。

○野村委員

嘉名先生の意見に賛成で、溢れさせたあとにエッジが強く立っているものを 2、3 個ずつ上げる方が多分わかりやすいかと思います。例えばスタートアップを 50 カ国から大阪に集積させるなど。本当は 100 億とか配った方が早いのですがけれども、予算的に問題があると思うので。本当にエッジが立っているものから選んで叩き上げるぐらいの方が、政策的にも落とし込みやすいのではないかなという気がします。

繰り返しですがけれども、こちらに書いてあることは、富山県や石川県でも似たようなことが言えそうですので、もっともっと尖ったところに落とし込めるような設計がいかんかと思っております。

○川竹委員

私達の立場は皆さんとちょっと違って、皆さんは社会の枠組みを作る方達なのですが、実際その枠組みの中でこれから動いていくのは私達二人であったりということ、そういう視点で色々考えたのですがけれども、日本の万博までにやることというのは、本当に大きく二つで、一つ目が 5 年間でどれだけ人を救うかということ。明日からでもきちんと大阪の人を救うようなことをしなくてはいけないというのが一つ。

もう一つ目が、2025 年の時に未だ誰も想像出来ないような 2050 年であったり、そういう先の未来というものをきちんと見せる技術があるという、その二つだと思っています。

二番目で、大阪府さんは一番この Human Well-being を誰を頭に置いて書いているかと言うと、多分、大阪府で暮らしている方々のことだと思うので、ここに関しては今、大阪府さんが持っている課題というものを本当に上げてもらおうと、私達自身としても、「ああ、若い人達はこれから社会に出た時にこういう取り組みをしたらいいのだ」ということが分かって万博までに出来ることというのをイメージできるのではないのかなというふうに思います。

そのために3番目の「世界をつくる」について私はイメージが出来なくて、これは大阪府さんが世界に何かを貢献したいと思うのか、それとも大阪のダイバーシティを増やすために世界から人を呼び込むのかというと、これは何かちょっと曖昧だなと思っていて、例えば、子どもの貧困というのも大阪府で成功した取り組みを世界で実践するためにこれをやるのか、それとも将来的なターゲットが世界に貢献することなのか、それとも大阪が豊かになるということがゴールなのかというところで、ちょっと違うかなと思っていて。

今、自分が何が出来るかなというのを思った時に、具体的に何か出来ることが無いというのが少し思ったことなので。私達大学生とかが社会人になった時に出来るような、すぐそこにある課題というものを大阪府さんは知っていると思うので、書いていただくことが施策に繋がるのかなと思います。

○橋爪委員（座長）

事務局への質問でしょうか。最後の子どもの貧困問題というのは。

○川竹委員

世界のイメージですね、それが何かってところ。三番目のところは、教えていただきたいと思います。

○事務局

元々、前は世界に貢献となっていたんですが、万博では世界中の人が参加して、大阪としても、世界の課題に向き合っていこうと。それがむしろ、都市の魅力に繋がる。そんな都市をめざすべきではないかということ。

その意味で世界にどう貢献していくかを念頭に置いて、示していきたいということで記載させていただきました。

○川竹委員

ありがとうございます。私の趣旨としては、やはりこの5年間でちゃんと大阪が世界の皆が共通の課題である地球の問題とか気候変動とか、そういうことはすごく思っていたと思うのですが、その取り組みが大阪ですごく出されているというのは、私達若い人達はすごく見せたいというか、世界の中で大阪というところがすごいのだというのは見せたいところだと思うので、何かそういうところだと、三番目に入るのが地球というか地球規模の課題というところに向けた大阪の施策なのかなとは思いました。ありがとうございました。

○事務局

前回、課題が多いとご指摘があり、課題が多いということはそれだけデータが多い

等ということが世界から見てもあると思う。

そこをいかに世界に貢献できるようなことに結びつけるか。しかも、それが大阪の成長にも繋がっていく社会をつくっていかねばいかなない。万博もありますし、それをどうつくっていくのかということが、おっしゃる通り、身近な課題からスタートするのだとは思いますが、廃プラ問題もそうですけど、どれだけ貢献していくのか、それが大阪の魅了にもなるような、そんな都市像を描いていきたいなと考えております。

○川竹委員

ありがとうございます。

○野村委員

川竹委員は今、いいことをおっしゃっていて、課題解決を政策ダマにすればいいのですよね、当たり前なのですけれども。課題解決した方がいいよねみたいなことは各都道府県も意識として持っていて、もちろん大阪府も持っていると思うので、課題に対応した政策メニュー表があるといいのではないかと思います。例えば、資料中の「食文化の強みを活かした取組」や「子どもの貧困問題」といったものは全くその通りなのですけれども、大阪の食の強みを、早いし安いし旨いし栄養価もある、ということに置いたとしたならば、アフリカにお好み焼きチェーンが展開されるにはどういう政策的支援があればいいのかという話だと思うのです。あくまで一例ではありますが。

○橋爪委員（座長）

一つはグローバルスタンダードを考えるとという点。大阪がアフリカのマーケットを取り込むという発想も、世界各国、各都市と横並びの競争になる。一方で、地域独自の施策が求められる。方法論やアプローチの仕方、得意とするジャンルなどで特化する必要性があり、グローバルかつローカルの考えが求められている。

資料の6ページにある内容について、前の2ページ、3ページの内容と響き合うとしたら、上位概念は「人が中心」という考え方になる。あと「Amusing Creations」という、おもしろい創造性を示す概念が、この段階でも展開されているのかが重要になってくる。

なので、現時点の案でそこがまだ弱い。「人中心」という発想が全体に入っていない。あと「Amusing Creations」の発想が全体に響いていない。

先月、北欧に行って、本来のリビングラボの事例を見て来ました。北欧の政策では、北欧独自の民主主義と気候変動に対する意識が前提となって、すべての方策に通じている。それに反するようなことは将来に向けた考えには入っていない。私たちも、大きな物差しが必要。今のところ「人中心」と「Amusing Creations」などの概念がその根幹にある。いくつかのぶれないコンセプトのもとに、全体を構成、施策の体系づ

くりが出来るかというところだと私は思っております。

6 ページの施策は全て「人中心」で読み替えてゆくべきでしょう。防災やら災害対策もコミュニティベースの従来のどこでも同じような堤防をつくるというのではなくて、スタンダード化とかマニュアル化するのではなくて、その地域に応じた施策というのがなされている例がある。例えばマンハッタンの防潮堤計画「ビッグU」では、ビッグという設計事務所のアイデアが国際コンペで選定され、コミュニティと共に防潮堤をつくっている。地区ごとに全然違うデザイン、違う発想の入れた防潮堤が連なって行ってマンハッタンを囲むという施策を打っていて、世界中が注目をしている。コミュニティベースの防災という発想が貫かれている。一方で最新のテクノロジーを入れた防災計画、たとえばさまざまなセンサーを入れ、劣化とか全部わかるタイプの災害対応もあるでしょう。これは世界中で行われている防災のスマート化の先の話。技術で対応をしている。

ちょうど大阪市内、大阪全般ですね、津波高潮対策に関して、水門を順に手を入れる段階にある。次世代型の堤防を導入しないといけない。「人中心」というのはコミュニティベースの発想や、人に根ざした創造性を採用していくというところに尽きる。さっき、嘉名さんがおっしゃった、要は自動車中心からウォークブルな都市への転換が、世界の潮流。また、いかにアクセスビリティを高めるかとか、生き生きとしたような都市に変えていくのかというような指針を、世界の各都市が方向性として示している。20 世紀型の発想から、いくつかのブレークスルーがあって、変化のベクトルを示すという考え方は説明しやすい。施策の柱立てで、さっき申し上げたように 2025 年万博で我々がどう変わるのかという、その方向性が施策の方向性となれば整理出来るのではなかろうかと思っています。

○森下委員

最終的なイメージの話なのですが、このこういう個別な言葉が残った報告書になるのですか。それともこういう内容を盛り込んで、例えば次世代型ヘルスケアというのはこういうものなのだという内容で出すのか。どっちのイメージか。僕のイメージとしては、ここは今中間点であって、最終的に次世代ヘルスケアとして、例えば体温であったり、心電図だったり、あるいは血管年齢とか色んなものを同時に測定しながら、それこそ突然死が、「あと 30 分後にあなた心筋梗塞になりそうです」とか、多分それぐらいのことは全然いっていると思うのです。2050 年は。そういうのがあって、突然死が防げるような次世代型ヘルスケアなのか、あるいは徘徊の老人がどこにいてもすぐに分かるとか、あるいは徘徊自体をしても安全に出来るようになるとか。そういうイメージまでも書いた最終的な図を描くのか、それによって大分変わってくるとは思うのだけれども、どっちのイメージで最終取りまとめなのか。

○事務局

今年度の取りまとめの方針としては、府市の行政レベルで整理をするというのが第一ステージでありまして、その後に民間の取組や、市町村の取組を取り込んでバージョンアップしていくというのを流れとして考えております。

そういった今後のバージョンアップについては、2025年のその先に、例えば Amusing Creations があつたとして、それを実現するために、こういった施策の方向性があるのかといった部分が次にあると思っております。

少なくとも、どうゆう方向で施策を進めていくかを見えるように書いていかないといけないと思っております、そこは一つ一つを書き進めると膨大なものになってしまうので、ある程度まとめた表現として書いていながら、例えば、大阪府だったら大阪府の施策に結びつけるようなものを、紐づけしていくという流れになると考えられます。

○森下委員

イメージとしては、ここの図がもっとブラッシュアップさせたものがあって、その表を更に何と言うか、より具体的にした 2050 年の街の例みたいなものもう一枚くつつくみたいなイメージで考えていいのかな。

○事務的

2050 年をどこまで追いかけるかはありますが、施策の方向性としては、施策に紐づくものを書く予定。ただ、先のことのため、イメージできるものとして、細かい内容を記載することは検討する必要があるのかなと。

○森下委員

全部は無理だと思うのだけれども、あまり何も無いと、またどんな街かイメージが沸かないから。だからここで言うと災害とかは、AI とか利用したような災害対策みたいなこともワーディングに変えていけばいいということ。そういうイメージで、これはこれで残るというイメージで言いわけね。

○橋爪委員（座長）

整理いただきたいのは、ビジョンの位置付けです。従来は、すべての自治体に総合計画がありましたが、いまは策定しなくても良いということになっている。大阪府は現行の 2008 年に策定した「将来ビジョン大阪」が 2025 年で切れる。また「いのち輝く未来社会」をめざすビジョンを、時期を切ることなく国際博覧会の誘致段階で策定した。いっぽう「まち・ひと・しごと創生総合戦略」は 2019 年で終わり、強靱化計画も 2020 年で終わる。おおよそ 2020 年代前半に現行のビジョンが順に切り替わる段階を迎える。これを繋ぐ意味合いで、私は 2050 に向けた「ポスト 2025」のビジョンが、今後策定される諸計画の上位概念を頭出しするものと理解している。個別の施策

や計画は、ビジョンの基につくられるので、ここで将来の絵姿や方向性を示すことは重要であるということは理解いただきたい。確認ですが、大阪府には総合計画はないですね。

○事務局

ないです。

○橋爪委員（座長）

総合計画がないなかで、中長期の方向性を示すことを今、ここで作業をしていることになる。

○野村委員

先生方も政府委員などを歴任されておりますし、僕も行政にいたのでわかるのですが、森下先生のご趣旨は本当におっしゃる通りだと思います。この紙を我々が議論するに当たって、どの抽象度のものをどれくらい出せばハッピーになるのかが見えにくいところであって。僕の個人的な意見を申し上げますと、2050年からバックキャストした委員が好き勝手なことを言いましたという整理が出来るので、100個のリストがあってもいいのではないかなと。言って頂ければ僕が叩き台を作りますので。amusingでも creative でもない謎の何かが出来上がってしまうのは悲しいなと思います。本当は、お金の問題なのか、人の問題なのか、規制の問題なのか、といったことがちゃんと見えていて、「こんなに面白そうな世界が描けるのであれば、万博でみんなで推進していこうぜ」と産業界ほかが集まって来るのがハッピーではないでしょうか。

○薬王委員

野村さんのおっしゃっていることはまさにそうだと思っていて、個人としては実際に100個ぐらいこういう感じの施策を出すべきだと思っていて、そっちの方がエッジなのが出るのだろうと思っています。

その時に、僕の現時点での認識ではあるのですが、最初は Amusing Creations というのが、実際にそれが物差しになっていて。何かをするに当たってそれがポジティブなのかネガティブなのか、判断するのが Amusing Creations であるかどうかという判断軸があって、その次にどういうベクトルで大阪が進んでいくのを是とするかというのが、この三つの要素なのだろうと思っています。

なので実際、2050年がどうある未来なのかというのは、第1回議論の会議から言っている通り、特に2050年どうなるのかわからないというのが結論なのかなと思っています。そうなってきた時にどういう方向性でいくのを正しいと決めきるかというのが、今の論点で一番重要なのかなと個人的に思っています。その中でいくと「多様なチャレンジによる成長」と「いのち輝く幸せな暮らし」と「世界をともにつくる」

というこの軸で、大阪が育っていくのを是とするかというのが一番重要なポイントなのかなというふうに思っています。

○嘉名委員

役所が作る会議で言うと懇談会・懇話会の類のものだと思うので、イコール役所の施策ではないということだから、「もうちょっとエッジが効いててもいいのではないか」というのが皆さんの意見だと思うのです。

その上で、今後の頭出しみたいなことと言うと、例えば我々の分野で言えば最近よく使う言葉、タクティカル・アーバニズム、つまり社会実験とかトライアルして上手くいかないところは変えていく、つまり今までのメソッドを変えましょうみたいな話が出て来て、それが潮流として示す。

今までは行政は100点をめざすと言っているのですが、100点はなかなか無理なので、実際の施策は60点をめざすみたいなこと。だから、そうではなくて「失敗するかもしれないけれども、80点をめざすみたいなことをやりましょう。駄目なら変えていきましょう」みたいな、そういうやり方を変えましょうという話とか。教育の分野で言えば、例えばスタンフォードがやっているDスクールみたいなものとか、教育のプログラム自体を変えましょうとか。

それから、橋爪先生が言っていた北欧ではいま、どこに行っても今はリビングラボですよね。要は地域で色んな問題解決を「皆さんの意見を聞きながらやっていきましょう」みたいなのがメソッド化している。「じゃあ、これどうやるの」という時に、どうアプローチをしますという頭出しがいるような気がするのです。それは従来の行政施策とやはりちょっと違う。今までの行政施策の延長ではない新しいやり方が求められているのだとみたいなことは是非、入れておいた方がいいのかなという気がします。

だから、施策として課題設定で「10歳若返る」とか、「ウォーカーブルシティ」とか、「食文化の強みを活かした取組」、こういう書き方もいいけれど、どうアプローチする、どう解決するみたいなところをもうちょっと際立たせた方がいいのかなという印象はあります。以上です。

○森下委員

理解はなかなか難しいと思うのですが、僕のイメージは第一次安倍政権の時のイノベーション25の科学技術の計画を作った時、探していたのだけれども、あれのイメージに近いなと思ってずっと考えて喋っているのだけれども。要するにあの時は2025年のイノベーションでこういうものを実現したいと。そういうことが未来社会の中で意味があると。割とニーズ設定型で、「こういうのをしたいのでどういうイノベーションをしてみますか」みたいな議論をしたのだけれど。普通のお役所ものは多分シードリーディング。こういう施策があって、次の施策はこういうふうに展開し

てこういうふうにしますよという形が多いのだと思うのです。多分、2050年というお題目をもらった時点で思ったのは、2050年はこういうふうには大阪はしたいと、その為にどういう施策を2025年の万博を利用してやっていくかという会議だろうと理解して来ているのだけれども、で、あるとすると、2050年の姿を多少は見せない、やはり見えてこないと言うか。2050年大阪が発展する時、その為の技術要素で選び出して、そこを具体的に肉付けしていくというレポートかなと僕は理解しているのです。

そこのところが何となく全体的に混在しているから、従来の延長線上の施策であるところと、すごい飛んでいる話とかが交互に来ているのが、何となく今のところ分かりにくいというか、ここの議論も毎回毎回あちこちいってしまうのが、たぶん、そのせいじゃないかと思っているのです。ちょっと整理してもらえると分かりやすくなると思う。

○橋爪委員（座長）

ベンチマークになるのは東京の2050の懇話会の提言。七つのキャピタルなるものを上位概念に置いて、夢物語を含むブレイクダウンしたアイデアを並べる。月まで宇宙エレベーターで行けるというレベルの話と、自動運転が普及するというすぐにも実現しそうな話と同じレベルで並んでいる。東京の提言は、総花になっていて、しばしば行政が作るビジョンの置き方にはまる。ただ、キャピタルという言葉を使っている意味はあって、その分野において世界から見れば抜きん出た中心になること、ハブをめざすということ。

我々は違う立て付けのもとに、今、将来を検討しようとしている。「人中心」という概念があるとして、その下にいくつかの方向性を並べ、さらにその下に施策を置く構成になる。この施策のところ、エッジを効かせるというよりは飛躍した、イノベーションを経て出来そうな施策を列記するのか、今から出来る足元のことを書くのかはまだ議論の余地がある。東京の懇話会の報告書とは全く違う立て付けと全体の見せ方をしていくというところだとは思いますが。

6ページのところをどう収めていくのか。次回、今日のご意見を鑑みながら、具体的にどうかとか、何を書くとか、どういうレベルで何を書いてくるかというところを精査して出していただけるといいと思います。

○薬王委員

今の橋爪先生の意見に追加と言うか、この施策の方向性が非常にわかりにくくなっている理由は、単純に時系列が減茶苦茶になっているというのが多分あると思っています。今まさに、今から課題解決で行われそうなものと2050年地点でまさに動いてやらないといけないところの二つの施策が混ざり込んでいるので。きっとこれを求める上では今から2050年までタイムスパン上でまとめてしまった方がきれいになる

のじゃないのかなと思っています。

○橋爪委員（座長）

他、いかがでしょうか。東京の懇話会のものを見ていただくと分かりますが、「預言」というかたちをとっている。参加している委員がそれぞれに未来はこうなるのだろうと可能性を述べている。予言ではなくて、託された意見という意味合いの「預言」の文字を使っていながら、将来こういうふうになるであろうということを可能性として示している。

○嘉名委員

さっきからずっと考えていて、いい答えになるのかどうか分かりませんが、例えば「世界をともにつくる」は他都市でも使えるという話が出ていますけれども、例えば世界が大阪をつくるとか、それから大阪が世界を変えるとか、大阪とかもうちょっと使ったら。この三本柱ぐらいは大阪が何かを変えるとか、何かをつくるとか、さらには地球を救うまでいってしまう。大阪が地球を救うとか。それぐらいの振り切りでもいいのかなと。それと「大阪が」ということと、「世界が」とか、そこが繋がっているみたいな感じ、お互い呼応しやって、お互いハッピーな状況を作っていく。そういう感じで例えば「多様なチャレンジ」も「いのち輝く」も考えていくと、大阪も引き立つし世の中も良くなる。そういうストーリー、書きぶりにした方が、考えていることは伝わるのかなという気がしますけれども。

○橋爪委員（座長）

他、いかがでしょうか。

○野村委員

今の先生のお話は滅茶苦茶面白くて、僕、今日ずっと気になっているのですが、今日の会場は結構問題もあると思うのです。厳かすぎて、この議論が amusing じゃない。これは真面目な話なのですが、ここにいらっしゃる先生方が 2050 年に大阪に本当に住んでいるのかみたいなところをリアルに考えないといけないと思います。これに値する社会像が腹落ちするまで議論して言葉に落とさないと、これまでの議論の経過が無駄になってしまうのではないかと切実に感じています。

○橋爪委員（座長）

次回に続く議論だと思いますが、要は大阪が世界に選ばれるような都市にならないといけないと思います。都市間競争、地域間競争の中で、世界の人が大阪を選ぶということが重要です。そのためには、いかに他とは違う地域として発展していくかが求められる。この点はぶれてはいけないと思います。そういうふうなビジョンになって

いるのかということが大事だと思います。

よろしいでしょうか。年内、あと一回、会合をもってまとめに入っていくかたちをとります。

後半、総括いたしません、次回以降またよろしくお願い致します。ありがとうございます。

では、議事をお返しいたします。

(以上)